



作品「記憶－記録」霜鳥健二／ここに暮らす約40人の人がた（鉄板）をつくり、野外に設置
（本文中に関連記事があります）

目次／contents

人・まち・地域…………… 2

- ・ 地域再生とコンサルタントの役割／金井萬造
- ・ 成熟都市の都市再生への視点～東欧の歴史都市の状況～
／堀口浩司
- ・ 第1回地域住宅計画賞一技量抜群一を受賞しました／松木一恭
- ・ 自治体の憲法として将来のあり方を描く「自治基本条例」
策定へのチャレンジ／安藤謙
- ・ 関西の自治体における計画行政の課題～自治体アンケート調査の
結果から～／森脇宏
- ・ コンパクトシティを考える／福井秀樹

きんきょう…………… 10

- ・ もっと進めよう！まちづくりへの子どもの参加／嶋崎雅嘉

メディア・ウォッチ…………… 11

- ・ 「ゆがんだ通路」－宇宙のかくれた次元の謎を解く－
／取締役会長 三輪泰司

まちかど…………… 12

- ・ 大地の贈り物「大地の芸術祭－越後妻有アートトリエンナーレ
2006」／中村孝子



地域再生と

コンサルタントの役割

代表取締役社長／金井篤造

コンサルタントの存続が問われている

アルパックの設立40周年が目前となっているが、業界の地方シンクタンク協議会も平成17年度に20周年を迎えた。今、地域におけるコンサルタントの役割が問われている。

地方シンクタンクの動向を見るのに大きく3つのグループに分けて考えることができる。第1グループは地方行政機関の外郭団体などの行政系、第2グループが銀行、電力など財界系、第3は株式会社、NPO、大学などの独立系に大別でき、経営者会議などの集まりでもこのグループで分科会が構成され、共通の課題について討議されることが多い。この数年間の変化として、地方行政改革の進行に併せて2～3割の会員機関が統廃合された。この中には、行政系、財界系の機関が多く含まれている。意外と独立系は厳しい経済環境の中でふんばっている。

発注者である行政、経済界のニーズも大変化を起こしている。委託調査の発注単価の減少、発注件数の減少、市町村合併の中で、これらの傾向が強まっている。

発注方式も、この2～3年で企画コンペ方式が急増し、この対応に大きくもまれてきているのが現状である。特に、独立系の会社を例にとってみると、発注時期が集中し、同時に数件の企画コンペ対応をせざるを得ないことから、少ない人員の研究機関やコンサルタントは企画書作成要員の確保が難しく、大きく苦戦を強いられている。

コンサルタントへの要請も、従来の問題解決型だけでなく、提案内容を具体行動を通して実現に導くことが出来てはじめて計画であると認められる政策プラスDOタンクの機能が求められている。

さらに、元々、巨大シンクタンクと一定の住み分けをしてきたが、大学やNPO、コミュニティシンクタンクなどの参入によって、競争が一段と激化している。

以上のように諸情勢の変化する中で、各コンサルタントは、日々奮闘し厳しさに耐えているのが実情である。

正直いって、コンサルタントの将来展望の糸口をどう見つけ出せるかが当面する大きな共通の課題となっている。

厳しい状況の中でも経営・運営が好転しているシンクタンクが約1割存在するのも事実である。財界系や大規模系に多く存在するが、対応内容をみると、組織の総チェック、特に支出構造の再チェックによる合理化の推進、組織の収入増に結びつく支援機関の応援体制強化などが功を奏している。

しかし、地方シンクタンクの約9割の機関は厳しい状況から脱していない。何らかの具体的な対策を打たなければ、存続の危機に結びついていく状況が一般的である。さらに、財団法人系は組織形態が問われており、重要課題となっている。行政系のシンクタンクも地方自治体の財政悪化の中で統廃合がさらに進むことも予想される。

一方、地域社会や時代の潮流をみれば、地域再生に果たす地方シンクタンク、コンサルタントの活躍の出番が到来しており、現状を脱して、地域再生に主体的に取り組み、地域社会に貢献していく筋道を見つけ、前に進むことが要請されている。

時代潮流、地域ニーズに反応する現場

コンサルタントはよい仕事をし、地域発展に貢献するため、必死に生き抜き、初志どおり活躍をするべく、新しく要請されている職能を身に付け、アセカき知恵出しの日々を過ごしている。現状打開の取り組みが進められている現場のコンサルタントの活動例に着目してみよう。

まず、毎年、単価減少の厳しさが増す中で増加した件数を消化するために一人が1.5人か2.0人分の仕事を担当せざるを得なく、フルタイムの対応となっている。2つ目は、業務に総合的に答えていく

ために、従来のコンサルタントの機能に併せて政策化機能やDOタンク機能を発揮して活躍分野を拡げることにより、付加価値をつけて解決に近づこうとしている例である。3つ目は、従来の調査・計画では単価の下落を防止できないので事業化面や事業の運営面など事業の多段階に関係することにより、より付加価値のアップをめざしている例である。4つ目は、時代潮流、地域ニーズ、その時々々の政策ニーズに着目して、職能の開拓と併せて得意分野として挑戦し、自分の業務分野を拡大している例である。5つ目は、コンサルタント一人の力量や容量、スピードに限界があるため、チームワークを発揮し、総合力、連携力、組織マネジメント力を生かして、難しいが付加価値が高く、地域ニーズに対応している例である。6つ目は、情報化時代に対応して、業務情報をいち早く入手し、対応していくことによって、単価の高い受託を確保している例である。7つ目は、地域を限定して深く検討・研究することにより、多くの業務を効率的にやり、投入する労力を節減して付加価値をあげている例である。8つ目は、企業の境を越えて企業間や技術者間ネットワークを構築し、総合体制による質の高い業務推進と効率の向上を図っている例である。9つ目は、業務体制のシステムにより、アシスタント（助手）を導入するなど分担制を実施して効率化と付加価値アップを図っている例である。

以上、9事例を紹介したが、アセをかき、知恵を出して、現状打開に向けて積極的に取り組んでいる。1つの知恵が移転して新しい知恵出しに結びつけ、厳しい中でもすばらしい経験が蓄積されている。

今程、元気に役割が発揮できる時はない

コンサルタントの厳しい現状とその中で対応し反応する現場の技術者・研究者の状況を例示した。しかし今こそが、地域再生の時代要請から、コンサルタントが元気にその担っている役割を発揮し

て課題に対応し、地域の発展に貢献するチャンス到来といえるのではないかと。

地域が元気で活力のある再生づくりの5つの取り組み方向を提案してみたい。

①地域資源を価値あるものに再生する

地域資源を再発掘し、価値あるものに活用していく。そのためにはSWOT分析などにより、強みや弱みや個性・特性を明らかにしていく。財政・財源の厳しい中で「地域力」を発揮する人材資源を特に重視する。人材の知恵とアセ（行動）、スキルを活用し、地域のブランド化をめざす。

②人、組織づくりと体制を生かす

地域の連携やパートナーシップが発揮できるよう人材、キーマンのネットワーク化をはかり、総合活性化のコーディネート力やプロデュース力で地域の発展方向性や事業の推進をはかる。地域構成員の一体感を重視して、地域の運営・経営を進める。

③他の地域と交流、連携を強める

地域内での完結した圏域とならないように工夫する。広域交流や連携による、外資導入も含めた、人、文化、ものの交流による地域再生をめざす。いま地域にあるものを伸ばし、不足しているものを補強し、地域に新しい風や技術を導入する。

④地域再生の政策の評価、持続モデルを構築する

地域再生に結びついているかどうかをチェックし、評価を実施し、持続する地域再生モデルを追求していく。

⑤人材育成は独自のテーマとして重視する

人材の役割が非常に大きいことから、大学、行政、企業との連携の中で、中核となる人材の育成に取り組む。

アルバックは、ニュースレター読者や関係者の皆様の指導・助言を得て、さらに努力を傾けていきたいと思っています。



成熟都市の都市再生への 視点

東欧の歴史都市の状況

大阪事務所／堀口浩司

縮小型計画都市の状況—本来の目的

産業衰退と人口減少傾向の著しい旧東ドイツの産業都市では、縮小型の都市計画・住宅政策が進められています。旧東独地域の都市改造（Stadtumbau Ost）プログラムの事例都市（アイゼンハッテンシュタット）を見て、当地市役所で日本における衰退地域の再生プログラムと環境回復の実例を紹介し、相互の知恵を交換しようという公開シンポジウムを開きました。日本側からは、北海道夕張市の事例や尼崎市の事例、高尾山の環境回復事例などを紹介するとともに、都市計画に関わる行政実務者との意見交換を行いました。

ドイツの縮小都市計画の内容については、代表例として、「公共住宅の減築」（増築の逆）が既に報告されているので、ご存じの方も多いと思います。我々が訪問したアイゼンハッテンシュタット市は旧東独とポーランドとの国境に近い地帯に位置し、東西分割の後、東側で最初に建設された3つの計画都市の一つです。産炭地域でもあり、アイゼンというその名前のおり製鉄工場を中心に発展しました。東西ドイツ統一後、急速に西側都市への人口移動が進んだため、公共住宅や都市基盤を縮小し、都市経営の軽量化と環境回復をねらった政策がとられています。

縮小都市計画の内容については、まだ十分解読できていない部分も多いため、都市環境デザイン会議（JUDI）内の研究会で、当地での発表や意見交換の

整理も行いながらまとめてゆく予定です。別の機会に発表したいと思います。乞うご期待。

歴史都市のモダンデザイン

アイゼンハッテンシュタットに入る前に、ブダペスト、ウィーン、プラハ、ドレスデン、コトブス、ゲーリッツという東側の歴史都市を早足で駆け抜けました。文化遺産の多いこれらの都市では、成熟都市の都市デザイン、建築デザインとして参考になるものも多く、感心させられました。今回は日本でも関心が高く、いろんな都市で試行されているパブリックアートとオープンカフェ事情を中心に外部空間のデザインを紹介します。

リスト広場（ブダペスト）

日本の喫茶店に該当するカフェは、上記の都市では建築空間の完成度や外部空間の使い方などある意味でカフェ文化というレベルに達しているなあと感心させられました。「たまに行くならこんなカフェ」というレポートです。

寒い国では暖かい時期のオープンカフェが人気です。写真3は、細長い公園（中央分離帯の広いもの）を利用し、両側の車道を歩道（オープンカフェ）化し、公園の両側に10数件のカフェが並ぶ、カフェ横丁です。交通規制や管理区分といった面では、日本の仕組みを当てはめると「制度的に無理」というだけで、話が展開しませんが、ここで言いたいのは空間の豊かさや、気持ちの良さ、魅力あるスポットとしてのビジター吸引力など、都



写真1：集合住宅を解体中



写真2：解体を待つ住宅



写真3：リスト広場



写真4：モルダウ川沿いのカフェ



写真5：プラハ市民会館のカフェ



写真6：エルジェーベト広場

市の価値を高める重要な要素になっていることです。いくつかの店に入ってみました。かつてのような共産国のサービスの悪さはまったくなく、客あしらいが丁寧で、サービス精神が旺盛。サイドメニューや飲み物を勧める際に、マクドナルドの「ポテトもいかがですか」的な慇懃さも漂っておりました。世界遺産都市として観光客からしっかり外貨を稼ぐ重要な産業となっていることを実感しました。

快適な空間をデザインする（プラハ）

モルダウ川の河川敷や公園など気持ちよい空間が印象的なのはプラハのカフェです。快適な環境を商品化するという意味では飲食店ほど顕著な例はありません。ミュシャの壁画やインテリアも現存するなど、まさに一度は行ってみたい空間になっています。写真4のような船上のカフェや水際のレストランなど非常に贅沢な空間になっており、大勢の観光客が訪れていました。

既にEU加盟を果たし、これからユーロへの移行を迎えるこれらの国では、未だ現代的な産業基盤が脆弱なため、美しい国づくりや都市づくりが、地域経済の要諦となっていました。

公園の再開発（ブダペスト）

写真6は、旧市街地の中心部の再開発です。エルジェーベト公園を再開発し、バスターミナルと駐車場、それとコンサートホールを地下に格納しています。施設の機能は単純ですが、公園とその周りの構成が良くできています。公園の周りは歴史的な建造物の多く残る地区であるため、新築物件については高さや屋根の形態規制（恐らく断面を指定）、再生可能な建物は順次、外壁修復とリノベーションを進めています。一方、公園そのものは周辺道路と同じ高さのオープンスペースにしています。公園そのものもシンプルな構成で、矩形の水面（プール）

をウッドデッキと芝生で囲み、その周辺にパブリックアートを配置するといった構成です。公園は隣接する美術館と連携して、屋外催し物会場として使われています。行ったときには「ハンガリアン・デザインマーケット」というアートイベントを開催していました。秀逸なのは、公園の中央のプールの底が透明になっており、その下はコンサートホールのホワイエ部分となっていることです。ホワイエでは上部からの太陽光を受けて水底にいるようにゆらゆらと青白い光が差していました。もっともコンサートの開演時間はたいてい夜でしたから、夜は水中ライトを使っているようです（金沢21世紀美術館にあるレアンドロのプールを連想してください）。

コンサートホールの入り口は、公園の一部、サンクンガーデンを下がった位置に配置されていますが、その途中には屋外にモダンアートが配置され、周辺の歴史的な建物ともマッチしていました。

トラムのある町

今回のツアーでは多くの町にトラムが残存していました。しかも車両デザインも新しく、ネットワークも充実しています。これらの多くの都市は旧東側の都市であり、社会主義的都市計画に基づいて建設されているため、公共重視の交通政策は当然といえば当然ですが、コトブスのような人口10万人程度の小さい町にもありネットワークがあり、経営も出来ているようでした。ただ券売機がドイツ語の表記しかなく、外国人はついつい無賃乗車してしまう恐れがあります。さらに蛇足ですが、小さい町ながらここにはエネルギー・コトブスというサッカークラブがあり、今シーズンに初めてブンデスリーガ1部に昇格するため、地元では盛り上がっていました。小さくても地方の自治と独自性を重視するドイツらしさを感じました。



第1回地域住宅計画賞 「技量抜群」を受賞しました

京都事務所／松木一恭



京都の町を代表する京町家を修復し活用する事業として、大家さんと地元の不動産屋さん、工務店、そして京都市とともに計画から設計監理までお手伝いをさせていただきました上京区の御所東団地が、地域住宅計画推進協議会が表彰する「地域住宅計画賞すまいづくり部門―技量抜群―」を受賞しました。

この10月12日の第1回地域住宅計画全国シンポジウム2006大阪大会で表彰されました。地域住宅計画賞(旧HOPE賞)は、地域の気候・風土、伝統、文化、地場産業等を大切にしながら、地域の発意と創意によりすまいづくり・まちづくりを推進した作品や活動を発掘するとともに優れた作品や活動について表彰を行うことにより、広く地域の発意と創意によるすまいづくり・まちづくりを促進することを目的としたものです。

この事業は、京都市の「京町家再生賃貸住宅制度」を活用しました。京町家は、建築基準法施行以前の建物のため、通常は現行規定に準拠することが難しい既存不適格建物ですが、限界耐力計算のもとでの耐震改修、防火性能の向上及びバリアフリーの性能向上に資する工事に補助する制度です。国土交通省所管「準特定優良賃貸住宅制度要綱」に基づき、京町家を賃貸住宅として再生する民間事業者を支援することで、京町家の保全・再生が図られることや、その波及効果として、現在空家である等の理由で手入りの行き届いていない他の京町家がストックとして有効活用されることを目指した制度です。大家及び居住者の安心感を高め、併せて、京町家の賃貸住宅再生事例として周知することで、民間事業者による京町家の賃貸住宅経営及び改修工事の普及啓発を促進することを狙っています。

公共と民間が協同して地域の資源を活用し、住宅を中心に豊かなすまい・まちづくりを推進すれば、より豊かな地域環境が実現でき、地域の活性化も可能であると思います。

新たな技術を導入し町家を再生

今回の受賞理由に「技量抜群」の評価を受けています。技術面についてに紹介します。

①防火性能を向上させる

延焼を受けやすい構造になっている外壁や小屋裏、軒裏に対して、防火性を高めた材料で再生を図る。

イ. 外壁仕様の変更

耐力的に劣化し防火性能が低いと思われる隙間の多い粗壁およびしっくい壁を耐火性、断熱性、耐久性、強度性のすぐれた新素材を利用し新たに開発したしっくい壁に改修した。また、主要構造部である柱等においては耐火性のある塗料で古色塗りにした。

ロ. 小屋裏界壁の設置

小屋裏界壁が無く隣戸への騒音や屋根裏をとおしての延焼が懸念されていることから建築基準法上の小屋裏界壁を設置した。

ハ. 裏の防火性能の向上

②耐震性能を向上させる

劣化の激しい構造材や基礎部を改修し、限界耐力計算に基づき耐震性の高い構造として改修をした。

イ. 劣化材料の改修

根腐れ部分を根継ぎや取り替えにより、強度を高めた。また、既存の小屋梁等の断面が小さく、劣化していたので梁を差し替え金物により補強した。

ロ. 基礎部の強化

基礎が無く、基礎が必要な箇所においては基礎を新たに設け、また、根がらみをダブルで設置して強度を高めた。

ハ. 壁の強化

新しく開発された仕口ダンパーを限界耐力計算に基づき設置し、耐震力を高めた。また、土壁の評価をきちんとし、劣化している土壁に対して強度を高めた土壁(竹小舞を梁まで施すなど)に改修した。

③加齢対応を行う(段差の解消、手摺の設置等)

主要構造部である階段の改修が図れないために既存の階段に手すりを設けた、また、台所と居間との段差や浴室、便所に行くまでの段差を解消し、バリアフリー化を行った。

浴槽のまたぎ高を低くするために、すのこやまたぎ高さの低いユニットバスを設置した。

今年の地域住宅計画賞では、姉小路界限を考える会の「市民主導による美しい都市づくりへの実践」も地域住宅計画賞(まちづくり活動部門)で受賞され、賞3部門のうち京都で2部門を受賞したことになります。

自治とは、自治基本条例とはなに？
自治体の憲法として将来の
あり方を描く「自治基本条例」
策定へのチャレンジ

名古屋事務所／安藤謙

自治基本条例ってなに？

最近、かなりの市町村で制定されている自治基本条例は、まちづくり条例や市民参加条例と同様、いやそれ以上に市民や住民のためのものといえます。

分権化の進展するなか、まちの特性をいかした独自のしくみとローカル・ルールが必要です。自治基本条例とは、自治体運営のしくみとルールで、自治体ではこれを最上位の条例と位置づけ、自治体の「憲法」ともいわれています。

犬山市での「憲法」づくりへの取り組み

自治基本条例は、策定済みのものでは9割がほぼ同じ構成、内容となっています。

平成17年夏にスタートした犬山市では、市民代表による検討会で、憲法とはどんなものか、何のために、誰のためにつくるのかを考え、事例にこだわらない、わかりやすく犬山らしい条例づくりをめざして取り組んできました。

市民を中心に据えた間接・直接参加のしくみ

条例は議会の議決が必要ですが、憲法は議会組織の前にあるもので、決めるのは市であれば市民であるとの考え方で、住民投票に準じた中学生以上の全市民意向調査を計画しています。また、条例をつくる意義は、分権化の地方権限の拡大に伴うルールづくり、地域のことは地域で考え、地域自らの責任で決める自己決定と自己責任という自治を実現し、自立した地域をつくるためです。

条例を最終的に決める議会、提案者の市長は、主権者である市民の「信託」を受けるものであり、条例は市民を主権者とした信託による自治(間接参加)と市民の直接参加のしくみを表すものでなければなりません。

条例が市民のためのものであるからには、市民の視点から構成され、使われてはじめて意味があるものです。そのため、中学生以上が理解できる、わかりやすい条例の解説づくりを現在試みています。

マニフェスト型自治体運営と市民自治区

犬山市の条例は、マニフェスト型自治体運営と市

民自治区を大きな2つの柱としています。

マニフェスト型自治体運営とは、選挙時の公約を市民と市長の契約と考え、PDCA (Plan, Do, Check and Action) サイクルを念頭に、「選挙-計画-決定-実行-評価」を一つのサイクルとしてその実現を図ります。条例はこのサイクルで構成し、各主体別に記述しています。

市民自治区は、自治法の地域自治区を基本に、自治区に一定の予算と予算を含めた決定権を与え、選挙など民主的に選んだ市民自治会議が、意思決定機関として地域の自治を行うもので、将来的には近隣政府への展開をイメージしています。

ここでは、地域のことは地域で考え決めていきたいという強い市民の意向を反映したものです。これは、決定権を委ねた市の税金であり、協議会やコミュニティ等の任意団体ではない公的組織である必要があります。全市民の参加が前提です。

今後の展開は・・・

現在、全市民意向調査を前に、様々な状況変化や事情があり、目標とした今年度での提案は微妙になっています。議会からは多くの提案を受け、盛り込んでいますが、マニフェストには抵抗があります。今後どう展開するか、また報告させていただきます。

理念型や誘導型、規制型など条例によるまちづくりが、ここ数年来増えており、大きな枠組みづくりといえるこの動きは今後とも拡大すると思います。

最後に、目標が見えない時代といわれますが、他人の予測はさておき、目標や未来は私達自身が描くもので、目標をどう実現していくかが重要です。そこに私達の係わりが問われてくると考えています。





関西の自治体における計画行政の課題
自治体アンケート調査の結果から

大阪事務所／森脇宏

はじめに

私が事務局を務めています日本計画行政学会・関西支部では、支部活動の活性化の議論に資するため、今夏、関西の自治体へのアンケート調査を実施し、学会への期待等を把握しました。ここでは、このアンケート調査で把握した「自治体における計画行政としての課題」の回答結果をご紹介します。

アンケート調査の概要

今回のアンケートは、関西2府4県（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県）の府県及び市町村（213自治体）を対象としました。各自治体の企画担当部署の責任者あるいはそれに準ずる方に記入をお願いし、104自治体から回収できました（回収率49%）。

計画行政としての課題

アンケート調査で把握した「自治体における計画行政としての大きな課題」（複数回答）は、右下グラフに示すとおりです。都市圏と地方部とでは少し傾向が異なっていますが、「行財政改革」は都市圏、地方部いずれも断然トップでした。なお、「最も大きな課題を1つだけ」と質問した結果でも、「行財政改革」が圧倒的に多い回答でした。

都市圏に限定すると、上記「行財政改革」に次ぐのは、「市民参画・協働」（64%）、「安全・防災」（55%）、「子育て支援」（51%）、「行政評価」（31%）、「高齢化対策」（28%）、「地域福祉」（27%）の順で、多様な課題が山積しています。

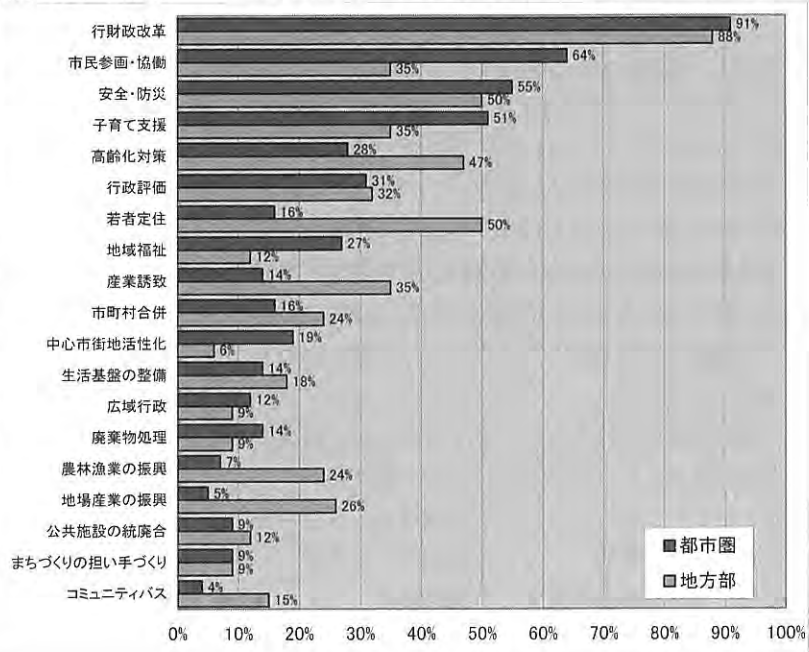
一方、地方部に限ってみると、上記「行財政改革」に次ぐのは、

「若者定住」（50%）、「安全・防災」（50%）、「高齢化対策」（47%）、「市民参画・協働」（35%）、「子育て支援」（35%）、「産業誘致」（35%）、「行政評価」（32%）、「地場産業の振興」（26%）、「市町村合併」（24%）、「農林漁業の振興」（24%）の順であり、都市圏以上に多様な課題が山積しています。

関西支部としての対応

アンケート調査の全体的な結果は、9月に開催された日本計画行政学会の全国大会における関西支部主催のワークショップで報告し、自治体における計画行政の活性化と、関西支部の役割発揮をめざして議論を深めました。

現在、関西支部では、こうした議論を踏まえ、①新たな計画論（ex. 人口減少論）の研究、②自治体職員が参画する研究プロジェクトの組織、③関西支部としての社会的発信、と3つの切り口から、支部活動を強化する検討を始めています。読者の方々には、今後、何らかの形でご協力をお願いするかもしれませんが、その際は、よろしく願いいたします。



コンパクトシティを考える
古い街の隠れた魅力

名古屋事務所／福井秀樹

先日、『名古屋市におけるコンパクトシティを考える』をテーマに市職員とコンサルタントの合同勉強会を行いました。名古屋市は、人口減少が予想されるなかで、土地区画整理事業によって整備された広大な基盤の維持、依存度が低い公共交通機関の維持といった他の大都市にはない独自の課題を有しています。

大都市には、都市圏の中心都市としての機能とそれぞれの地区での日常生活という2つの側面がありますが、後者に着目し、駅を中心にした生活圏を形成するというイメージをたたき台に議論がなされました。私は仕事から景観やバリアフリー、環境負荷の観点と、自らの経験より一つの事例を紹介しました。

歩いて楽しい名古屋最大の迷路・井戸田地区

名古屋は都心部から郊外まで、碁盤の目に近い形態の基盤が広がっています。しかし中世の頃から村であった地区が耕地整理から除外され、碁盤の目の中に迷路のように存在しています。その一つに「井戸田」があります。私はこの住宅地に住んでいます。

2年前までの10年間程度、郊外の区画整理によって作られた戸建てが主体の住宅地に住んでいました。多くの街路は8m以上、直線的で見通すことができます。歩いてみると、見えていてもなかなかたどりつけない、景観も画一的で退屈と感じてしまいます。まさに車移動を前提としたスケールのまちであることを痛感しました。

一方、井戸田は標高4～10m、3つの丘からなる約350m四方の地区です。幅員3～6mの道路が、四隅から流れ込み、それらから毛細血管のように細い街路が巡っています。ここには領域性が明確に感じられ、地区へ進入する部分はゲート、中央付近は道路が集まり中心性が自然と感じられます。真っ直ぐな道路はほとんど無く、U字、S字、つづら折、緩い坂道など、歩くたびに景色が変化します。ところどころから地区中央のお寺の大屋根を垣間見ることができたり、意外性のあるところに道がつながっていたりと随所に歩く楽しさが潜んでいます。子供の頃、様々なルートで歩き回り、楽しみましたが、今は子供たちと「探検」と称して楽しんでいます。

歩いて暮らしやすいまちの秘密

自動車との関係はどうでしょうか。井戸田の外周には、耕地整理などによりしっかりした道路が作られました。これが環状路の役割を果たし、通過交通を排除していると思われます。大半の家には1台分は駐車場がありますが、地区の外周部や、細い街路の出口付近には自然とフリンジ駐車場が形成されており、地区内への過度な自動車の進入をある程度防いでいると思われます。交通量が少ないことに加え、地区内は細く、曲がった道であるため、車は徐行せざるをえず、歩道は全くありませんが、比較的安全に通行できます。お年寄りが手押し車を押して買い物に行く姿や子供たちが道路で遊んでいる姿をよく見かけます。

日常生活機能はどうでしょうか。小学校は東、地下鉄駅は南、スーパーを含む商店街は西、いずれも外周路に隣接してあります。学校は当然ですが徒歩、自転車利用が多いと思われます。車利用が多少不便である、商店に駐車場が少ないといった負の理由から、ちょっとした移動なら徒歩、自転車の方が便利という現実もあるかと思えます。我が家もここに来て車の使用頻度は確実に減りました。一方、地区の中央にはコミュニティーセンターがあります。ここにちょっとした喫茶やコンビニ、ポケットパークがあると歩いて暮らすまちのコミュニティーの中心としてより輝くのではないかと思います。

ゆっくり変化する多世代共生のまち

コンパクトシティの話からは少し外れますが……井戸田は人口15百人程度、65歳以上30%、14歳以下10%と少子高齢化が進んでいます。人口減が続いていますが、人口密度は11千人/平方キロあります。よく観察すると、木造長屋が大家さんの子ども達の家建て替わる隣居も見られます。居住者の高齢化、求められる住宅の変化、大家さんの都合などによって、少しずつですが確実にまちが更新していることが見てとれます。人口はもう少し減るかもしれませんが、一度出て行った若い世代が親元に戻り、人口も安定すると期待を込めて予測します。近居、隣居を好むのは名古屋の土地柄かもしれませんが、私も10年ぶりに子どもを連れて戻ってきた一



人で、4世代にわたる隣居世帯です。ここは歩いて暮らすのが基本ゆえ、家の前で子どもから高齢者までよく顔を合わせ、地域の人たちと会話する機会が増えました。

さて、名古屋市では、時代の発展から取り残され

た感じの井戸田ですが、コンパクトシティの観点からは参考になる部分もあるかと思い紹介しました。今回は私がここ井戸田に戻ってくるにあたって、木造住宅密集地に愛知の風土に配慮したエコ住宅を建設した話を掲載したいと思います。



きんきょう

もっと進めよう！まちづくりへの子どもの参加
～吹田南小学校での取り組み～

大阪事務所／嶋崎雅嘉

「子ども」と「まちづくり」

「子ども」と「まちづくり」と聞いて、皆さんはどのような関連を感じるでしょうか？

私たちの業務の中でも、これまで様々な場面で、まちづくりへの子どもの参加を進めてきました。

例えば、公園の設計にあたってのワークショップ（以下WS）に子どもにも参加してもらい、「遊び」のプロとして意見を出してもらうこともありました。

また、ビオトープづくりを進めるにあたって、子ども達と一緒に生き物調査をしたこともありました。

これらの取り組みの中からは、子ども達独自の視点を得ることができましたし、まちづくりへ子どもが参加することにより、大人の主体性が高まる効果もありました。副次的には子どもと大人の交流が深まったり、地域のイベントが活性化したりしました。

このように、子どもがまちづくりへ参加することは非常に重要なプロセスの一つなのです。そして、何より、子ども達が楽しみながら自分たちが住むまちのことに興味を持ち、まちのことを知り、未来のことを考えることを通じて、人への思いやりや自然の大切さ、価値観の多様性など、様々なことを感じてもらうことが大切です。

吹田南小学校での取り組み

今回、吹田市での調査の一環として、子どもの意見を把握するためのWSを企画実施することとなり、吹田南小学校の先生方との連携により、総合学習の時間をいただき、WSに取り組みました。全4回シリーズで「①まち歩き」「②マップづくり」「③〇〇になったつもりでまちを考える」「④まちの物語づくり」に取り組む予定にしており、先日、1回目のWSに取り組んだところです。

「子ども」の心は●●●でわじづかみ？！

今回の対象は4年生の子ども達です。企画段階では、子ども達がどんなことに興味を持っているのか、どんな反応をしてくるのか、想像がつかみませんでした。



ねえねえ、これなんや

とにかく子ども達が楽しく集中して取り組んでもらう必要があるので、いくつかの工夫を凝らしました。

例えば、最初のオリエンテーションでは、スクリーンにまちづくりにちなんだクイズを写し、クイズ番組風に行進。また、一人ひとりが役割を持ってまち歩きができるように役割分担をしっかりとする。そして反則技(?)ですが、説明用の指し棒の先にはとぐろを巻いた「●●●」。これで、子どもの心はわじづかみでした。

まちづくり学習への専門家の参加

子どものまちづくりへの参加については、この吹田市の取り組みだけではなく、前述のように事例には事欠きませんが、次の時代を担う子ども達には、もっともっと自分の住むまちのことに興味を持ってほしいと思います。

それは、今の子ども達が将来、自分たちのまちに主体的に関わり、住みよい地域を創っていくことになるからです。

そのために、まちづくりに携わる専門家の一人として、子どもの「まちづくり学習」に関わっていく機会をもっとつくっていききたいと思います。



次はどこに行こうかな？地図を見て考えよう

MEDIA WATCH

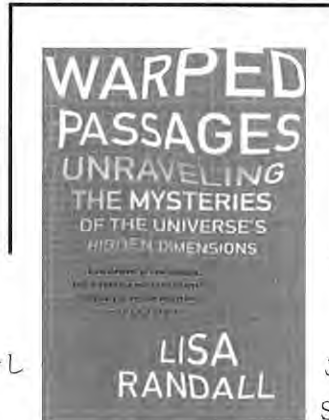
「ゆがんだ通路」

—宇宙のかくれた

次元の謎を解く—

WARPED PASSAGES Unraveling
the Mysteries of the Universe's
hidden Dimensions

著者／Risa Randall リサ・ランドール
出版／Harper-Collins Publishers, NY
2005



紹介者／取締役会長 三輪泰司

はじめに目次の大項目だけを紹介し
ます（筆者の勝手な訳です）。

- I. 空間の次元（および思考）
- II. 20世紀初頭の進歩
- III. 素粒子の物理学
- IV. ひも理論と膜
- V. 多次元宇宙の提言
- VI. 結びの思考

Amazon から初版本を取り寄せたのですが、500 ページもあって実は、まだ全部読み切れていません。各章のはじめには、「不思議の国のアリス」の引用や、楽しい比喩、おわりには箇条書きした要点、巻末には専門用語の説明、本文には一切数式がありませんが、文句をいう人のためか40項目の Math Note があり、見事な構成。素人にも親切な本で、拾い読みもできます。ステファン・ホーキングの「A Brief History of Time」邦訳「ホーキング、宇宙を語る—ビッグバンからブラックホールまで、1989 早川書房」と併せて読むと、いっそう面白いです。

昨年は国連の国際物理学年でした。1905 年はアインシュタイン驚異の年。3月「光電効果の理論」5月「ブラウン運動の理論」そして6月「特殊相対性理論」と3つの論文を出した年から100年目というわけです。1916年には「一般相対性理論」へ発展するのですが、はじめの論文は引用文献が一つもなく「皆さんこんなこと、見落としていませんか」といった調子で、時空の見方をひっくりかえしてしまったのでした。ホーキングの Brief History、本書のII章に描かれているように、20世紀初頭、物理学・天文学は手に汗握るようなドラマチックな進歩をしました。

この本もスリリングで、まさに Great Surprise の連続です。

今、新たな嵐の時代を予感します。その代表のひとりが、著者、ハーバード大学・MIT のリサ・ランドール博士。NEWS WEEK 誌2006年のキーパーソン。NHKがJAXAの宇宙飛行士・若田光一さんとのインタビューを放映して、わが国でも43歳の美人物理学者の人気が高まっています。

4次元に挟まれた5次元世界がある。大統一論でどうにも加わらなかった、重力だけが、異次元を出入りできるのだそうです。来年スイスで、陽子を衝突させる装置によって、確かめられるかも知れない。それは、膜のようなのでしょうか。

われわれの方法にも学ぶことがあります。第一は交流・議論。1911年「放射および量子の理論」をテーマにした“ソルベー会議”は、科学者の協同と連帯の場をつくりました。ランドール博士も国際的な討論が有益であったと言っています。

20世紀は、ヨーロッパが主舞台でしたが、今世紀の場所はアメリカに移っています。活躍しているのは、量子コンピューター開発のMIT・アイザック・チャン準教授やスタンフォード大学・山田喜久教授のように世界から集まっています。第二はその土壌条件—自由と民主主義。それは科学者・芸術家の良心を育て、支持する民衆。そして、科学者も民衆に分りやすく話しかけるのです。第三は、直観と論理、感性と理性のバランスですね。

相対性論はカーナビで身近になっています。量子コンピューターは人類文明を変えるでしょう。



大地の贈り物

大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ 2006

大阪事務所／中村 孝子

9月にふと思い立ち、緑の中でマイナスイオンを浴びながら芸術鑑賞を楽しもうと京都から車を飛ばし、明け方十日町市（新潟県）に到着した。遠いだけでなくあまりにも広い。里山や山間の棚田をバックに点在するすばらしい作品群を目の当たりにすると思わずため息をついてしまった。

3年に一度開催される「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ 2006」は、今回で3回目を迎え、期間は7月～9月の50日間と短い。このプロジェクトは、「地域に内在するさまざまな価値をアートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め世界に発信しつつ自律へ向けた道筋を築いていこう」とスタートし、今年は過去の作品120点を含む360点もの作品が展覧された。

さて、限られた時間の中で作品をいかに効率よく見るかと地図とにらめっこ状態になった。普段、活用しているカーナビの功罪ともいべきか、いったん山道に迷い込むとメカには頼れない。地図や町が設置した黄色い道路標識や幟、時には集落の人の道案内が心強い味方となった。

美術館などに行く写真撮影はできない、混雑する人にうんざりすることがあるけれどここではそんなストレスは関係ない。最初は、せわしく動いていたけれど、自然の中で作品を観たり、地元の人と談笑をしていくうちに「ゆっくり」とした時間の流れにのみ込まれてしまった。

例えば、NHKの番組などで紹介されていた「脱



酒百宏／ライフ・ワーク+みどりのへやプロジェクト 皮する家」を観ようと道に迷ってしまった時のことだ。離合が困難な山道を抜け、偶然、出くわした古い木造民家。ここでは地元のおじいちゃんが丁寧に説明してくれた。2階の壁は一面に自然の葉っぱをフロッタージュ（色鉛筆でなぞり写す）したものが貼ってあった。作家とおじいちゃんを含む地元の人とが、冬から葉っぱをフロッタージュして作ったとのことだ。作り手とお話できる魅力もさることながら、さらに天井部分は、まだ未完成で「どうぞ葉っぱを写してください」と言われた。自分も作品づくりに参加させていただくというすてきな時間の贈り物もらった。

越後妻有は世界有数の豪雪地帯だ。冬になればこの山間の集落も深い雪に閉ざされてしまう。であるが故に作品には自然の歓喜があふれていると感じた。3年後、私がここに再び訪れているのは間違いないだろう。

大地の芸術祭 HP:<http://www.echigo-tsumari.jp/>



内海昭子／たくさんの失われた窓のために



半田真規／ブランコはブランコでなく



戸高千世子／山中堤 スパイラル・ワーク

アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82
 大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
 名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 8F
 東京事務所 〒186-0001 東京都国立市北 1-1-17 田畑ビル 3F
 九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
 TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
 TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
 TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130
 TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128